

# 私学の建学の精神を活かした道徳教育についての研究

—地域社会との連携を通じた教材化の試み—

右 谷 浩 立命館慶祥中学校

## 1. 附属校における道徳教育に関する現状・課題

いま、学校法人立命館の附属校の4中学校1小学校において、「道徳」は、「立命科」と位置づけられ、各学年年間35単位時間、実施されている。内容は、各附属校の独自性を尊重するものの、2010年発行の「立命館で学ぶ君たちへ」を共通のテキストとしており、学祖西園寺公望、創立者中川小十郎、戦後初代総長末川博の人となりを通じて、私学立命館の建学の精神「自由と清新」や教学の理念「平和と民主主義」等を学んでいる。そのテキスト編集に取り組んだ各校の立命科プロジェクト委員は、その後も、年6回程度、道徳「立命科」の意見交換の場を設け、各校の道徳の授業について、実践交流等も、行っており、年1回、研究授業も、開催している。その立命科プロジェクトの成果は、2012年度「被災地の人たちの現状を知り、被災地の人たちから学び、学んだ成果を被災地の人たちに返し、被災地の人たちと共に励まし合える関係を築くための教材作り」～東日本大震災復興にかかわる附属校の取組を教材化につなげる企画を、委員全員が、東日本大震災直後の石巻取材し、現地の相川小学校や雄勝中学校などとの交流を深める中で、附属校共通の教材化を進め、DVD「3.11 東日本大震災に学ぶ」を製作した。

こうした形で、道徳教育の抜本的改善・充実を、学校法人の附属校として、図ってきたが、課題も少なくない。

道徳教育及び道徳の時間の目標については、①目標が総花的になりがちで、わかりづらい。②道徳教育の目標が教師・生徒・保護者・地域に、内面的なものに、偏って捉えられがちとなっている。

道徳教育や道徳の時間の目標が、教師・生徒・保護者・地域に、正しく理解され、理念が共有され、その趣旨に沿って日々の教育活動が推進されることが求められる。また、「いじめ防止対策推進法」第15条第1項の「学校の設置者及びその設置する学校は、児童等の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う対人交流の能力を養うことがいじめの防止に資することを踏まえ、全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実を図らなければならない。」に対するいっそうの改善と充実が図られなければならない。

道徳教育の内容、指導法、評価については、道徳の時間と特別活動をはじめとする各教科等との役割分担や関連を意識した体系的指導が確立されているとは、まだまだ言いがたい。シチズンシップ教育の視点に立ち、特別活動や他教科の指導との関連を図りながら、法やルールの意義を理解し、互いの人権を尊重し合い、自ら義務や責任を果たし、安定した社会関係を形成することの重要性やそのための具体的方策について考えを深化させるなどの視点を重視する必要がある。また、道徳教育の評価については、道徳性はきわめて多様な心情、価値、態度等を前提としているだけに、数値による評価をおこなうことは、不適切である。しかし、さまざまな活動を通じての生徒自身による振り返りや、指導内容・方法のための評価を妨げるものではないと考える。

教材については、現在各附属校では、「立命館で学ぶ君たちへ」を使用し、必要に応じて、資料やワークシートを作成したり、慶祥中学校のように、アイヌ文化振興・研究推進機構から無償提供されたテキスト「アイヌ民族：歴史と現在」を活用したりしている。道徳教育を充実させるために

は、道徳の時間における優れた教材の活用が重要である。テキストの効果的活用が、道徳教育の改善・充実にとって、重要な鍵を握っている。

教員の指導力向上方策については、現行の立命科プロジェクト委員会を中心に、全教員の参画、分担、協力のもとに、機能的な協力体制を確立することが求められている。また、立命科プロジェクト委員会を中心に、附属校、各校内研修、共同研究を充実させていくことが重要である。

保護者・地域との連携強化については、道徳教育や道徳の時間の目標が、正しく理解され、理念が共有されることが、重要である。授業の企画や公開授業で、保護者や地域の人々に参加してもらうことが課題である。

## 2. 取り組みの趣旨・目標

上記、現状・課題を踏まえ、以下の点において道徳教育の充実・改善を図っている。

- ①特別活動をはじめ、他教科との指導の関連を図り、道徳教育の体系化。
  - ②生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用。
  - ③立命科プロジェクト委員会を中心とした指導体制の確立と充実。
  - ④道徳の時間の授業公開、家庭や地域との共通理解と相互連携。
  - ⑤コミュニケーション教育事業など、表現活動を通して、共感的理解を深め、主体的に道徳的実践力を培う。
  - ⑥日本の伝統文化や生活習慣、礼儀・マナーを共有し、「多文化共生」や国際協力する態度を養う。
- いま、私たちは与えられない正解のない社会状況に対応しながら、ひとりひとりが自らの価値観を形成し、人生を充実させるとともに、社会の持続可能な発展を実現させることが求められている。そのために、新たな課題に向き合い、他者と協働しながら、主体的に解決策を生み出していくことが不可欠とされている。

ところが、現状において、若者の自己肯定感や社会的有用感、社会への参画に対する意識・意欲が低いことなどが指摘されている。また、情報通信技術の急速な進展の一方で、多くの若者が他者

とのコミュニケーションの困難を抱えていると言われている。さらに、少子化による「一人っ子」の増加が一つの要因となって、気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションをとりがちであったり、本人はコミュニケーションをとっているつもりが、実際には、自分の思いを一方向的に、伝えているに過ぎなかったり、というケースが目立ちはじめている。とくに、いじめ防止の観点からも、人間のあり方に関する根源的な理解を深めながら、社会性や規範意識、善悪を判断する力、思いやりや弱者へのいたわりなどの豊かな心を育むことが求められている。さらに、グローバル社会の一員として、国際協力を果たす上でも、日本の伝統文化や生活習慣、礼儀・マナーを身につけ、人間として踏まえるべき高い倫理観や道徳性が重要になる。

これらのことを踏まえ、道徳教育に期待される役割は、きわめて大きい。道徳教育は、人間教育の普遍的で、中核的な要素であると同時に、生徒に特定な価値観を押し付けたり、主体性を持たず、誰かの言いなりになるような人間を作ったりすることを目指すものではない。道徳教育は、人がお互いの人権を尊重し合い協働して、社会を形成していく上で、共有されるべきルールやマナー、規範意識などを身につけるとともに、よりよく生きる上で、大切なものは何か、どのように生きるべきかなどについて、生徒ひとりひとりが考えを深めることをねらいとしている。このことを通じて、自立したひとりの人間として、人生を他者とともに、よりよく生きる人格を形成することをめざす。

## 3. 道徳「立命科」教育用教材の作成

<取組の概要>

「立命館で学ぶ君たちへ」の内容を増補し、その増補する内容は、魔法のラーメン＝インスタントラーメンの開発をした安藤百福。

安藤百福については、「1910年、台湾に生まれました。学校を卒業すると、祖父の仕事を手伝う一方、図書館司書の仕事に就きました。仕事の傍ら、書物を拾い読みし、知識を吸収していきました。1932年、繊維会社を設立し、事業を拡大する一方、立命館大学専門部経済学科に学びました。

これからの時代は学問を修めていないと、肩身の狭い思いをするという安藤の先見性でした。1996年10月7日、学校法人立命館は、安藤百福に、『戦後のベンチャービジネスの卓越した成果である』として、名誉経営学博士号を授与しました。即席麺は、特許を一家独占しないことで、日本で年間54億食、世界で1027億食という大きな需要を生むことができました。1997年、『世界ラーメンサミット』の東京宣言は、『インスタントラーメンは世界の飢餓人口の救済に努め、将来起こりうる食料需給の逼迫に対応するため安定供給をめざす』というものでした。2006年、タイム誌『60年間のアジアの英雄』に、『食の革新者』として選ばれました。2007年、安藤の逝去に際して、ニューヨークタイムズは、社説で取り上げ、『ミスターヌードルに感謝』という見出しのもと、『安藤氏は人類の進歩の殿堂内に不朽の地位を占めた』と絶賛しました。彼が発明した即席麺を、『ホンダのシビックやソニーのウォークマンなどと並ぶ』『チームで開発したそれらとは違い、個人で開発したという点でさらに偉大な』日本人の優れた商品開発であると紹介しています。」との一文にまとめた。

#### <教材の概要>

##### ・教材の内容、作成方針

立命館大学経済学部卒業生の安藤百福に関する読み物で、生徒が道徳的価値について、考えるきっかけとなる素材を盛り込む。

安藤百福については、インスタントラーメンを開発し、世界の人々を飢餓から救い、女性の社会進出のきっかけまでつくった食の革命家の名言やその人生ドラマをまとめ、「食足りて世平か」の理想を追求した生き方からよりよく生きる上で、大切なものは何か、どのように生きるべきかなどについて、生徒ひとりひとりが考えを深めることをねらいとした。

##### ・教材作成の方法

立命科プロジェクトを中心に編集し、日清食品に、取材協力を求める。立命科プロジェクト会議の議題として掲げ、編集作業を進めた。

#### <取材>

2015年7月9日(木)10:00、日清食品インスタントラーメン発明記念館に、立命科プロジェクト委員が集合。日清食品ホールディングスより広報部の田畑富佐雄氏と村上瑛子氏の案内で、館内を鑑賞した。写真撮影・案内・「マイカップヌードルファクトリー」での体験等取材した。

16:30、立命科プロジェクト会議で、取材内容の整理と今後の編集方針について議論した。



#### 4. 道徳「立命科」教育用教材作成の成果

2010年発行の「立命館で学ぶ君たちへ」から6年経過したが、立命科プロジェクトとして、授業実践等の意見交換・交流の場を設け、継続してきた。さらに、その編集を通じて、立命科プロジェクトの活動が活性化し、立命科プロジェクト委員を中心とした道徳教育の指導体制の確立と体系化を図ることができた。

#### 5. 地域社会との連携を通じた教材づくり

「多文化共生を共に創る」をテーマに、北海道に生きるものとして、地域特有の課題を学ぶことを目的に、異文化に、「共鳴」し、課題解決の方策を「創造」するため、アイヌ文化研究を行ってきた。また同時に、自然との共存を基礎とするアイヌ文化の理解も深めてきた。

歴史を知ること、本当のことを知ること、そしてその歴史に思いやりを持つことが大事だということを具体的に学ぶことができた。「差別」を受けた民族、文化や言語を奪われた人々にとって、ないものとされた自分たちの文化は、未来で常に

自分自身に襲い掛かる魔物となる。否定されても捨て去ることはできないからだ。自文化を心に押し込め、隠し、最初からなかったもののように振る舞っても、自らのアイデンティティーがわからなくなるばかりだからだ。大人は親心が強ければ強いほど、差別から子どもたちを守るために、重い足かせとなる自文化を放棄し、伝えないようにしてしまうだろう。しかし、それは自分たちに続く子どもたちに、自分は、何者なのかをわからなくさせてしまう。自信を持ち自らを誇れる力を奪うことになるのだ。他者の文化を否定することは、そうした事態を招くほど深刻なものだという認識を含めた異文化教育であるべきだ。マイノリティーの文化に対する思いやりを持つための教育、知る勇気を持ち、受け入れる心を養う教育が必要なのだと思う。

## 6. アイヌ文化教材作成のための取材活動

アイヌ文化には、オリジナルなアートがある。ネイティヴな雰囲気のある、オリジナリティの強いものである。制圧されている自文化が広く国内そして海外の人々に広く受け入れられていったら、アイヌの心の変化は、計り知れないはずだ。アイヌに伝わるものを大切にしようと、誇りが持てるのではないだろうか。

そして、もっと大切なことは、ともに住むこの北の大地北海道の未来を考えるということである。異文化共生、多文化共生の問題は、思いやりの教育とともに、形を変え子どもたちを豊かな方向へと導いてくれるだろう。

<取材>

2015年8月9日 18:00 白老町「アイヌ民族博物館」主催事業「ポロコタン之夜」に参加した。学芸員解説付き博物館ガイドツアーがあり、「祈り」「歌」「踊り」「交流」をテーマに公演を観た。その後、試食試飲会「カムイトノト」に参加した。

2015年10月1日伊達紋別市「北黄金貝塚」、室蘭市「モロラン陣屋跡」、登別市「知里幸恵銀のしずく記念館」、白老町「ポロコタン」「仙台藩陣屋跡」を巡見した。



## 7. アイヌ文化を活かしていくために

かつてアイヌ文化にのしかかっていたコンプレックスやプレッシャーが、今のアイヌとこの時代をつくった。とてもあやふやで、はっきりしないアイヌ文化を構成している。

歌、楽器演奏、踊り、木彫り、刺繍などの芸術を通して、アイヌの思いを発信し、相互理解につなげる。アイヌの現状を知ってもらい、日本の先住民について、考える場を提供する。また、単純に文化や民族の独自性、ファッション、アートに興味をもってもらう場であってほしい。

また、アイヌ文化の自然観について、自然は、立体感を持つ。草木1本、鳥1羽にも、ユーカラを持つアイヌ文化の自然を思うやさしさを伝えることができる。

さらに、教材を通じて、アイヌの持つオリジナルなアートをもっと興していくこと。伝統も、モダンも、含めて、自由な表現があった方がいい。アイヌ語に関する学習の機会も必要だ。伝え合うためには、まずは言葉ありき、学校教育の中へ、アイヌ語の学びを組み入れ、それを通して、土地の意味を含めたアイヌの存在感を教育の中で伝えていきたい。